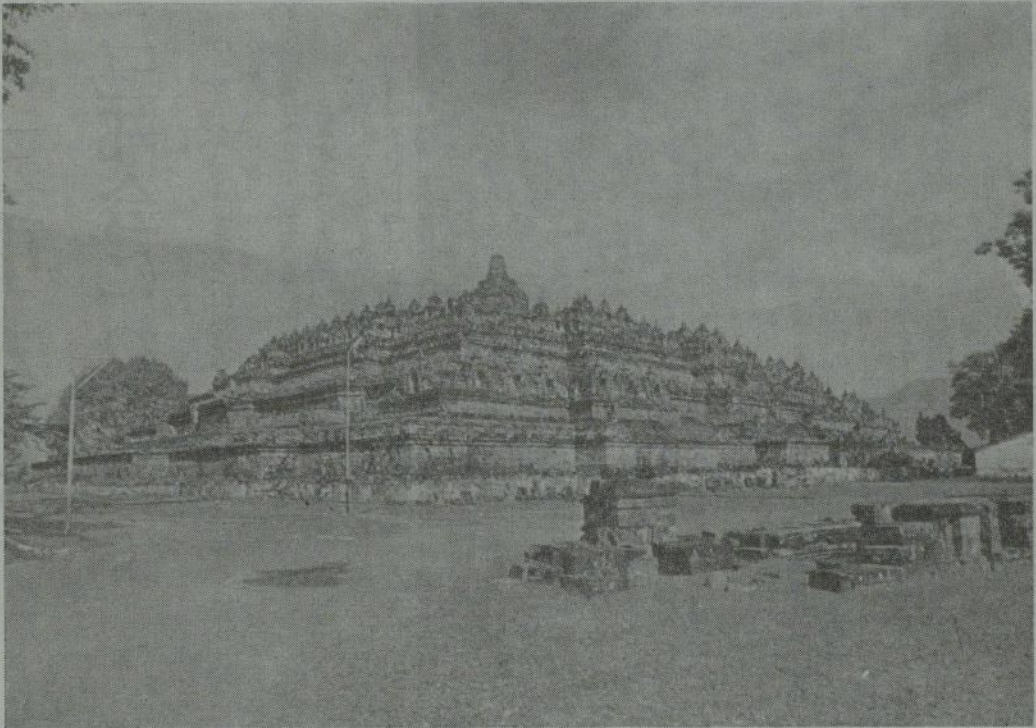


全 仏

NO. 217

5 / 51



“勇氣あるいぶき”

毎年行なわれる全仏大会に様々な提案がなされが、果たして仏教界として統一された意義のある見解を採択してきたであろうか。お祭りはお祭りとして大切であろう。しかし実際に一般寺院、檀信徒のために役に立つことが決議されねばならないであろう。

毎年の大会によって各県の仏教会が段々と結束されつつあることは大変に喜ぶべきことだが、今回再び提案されるであろう「黒い法要、葬儀の自粛」は既に各界の注目しているところである。われわれ仏教徒がこの様な意義のある実践をともなった案を決議することによって、更に一人一人の結束が強くなっていくことはあきらかである。全仏大会で勇氣ある新しい動きを世間にしめしてみよう。

(M・T)

写真は世界最大の仏教遺跡、ポロブドール
Ⅱ6面記事参照Ⅱ

仏教で強く正しく生きぬこう

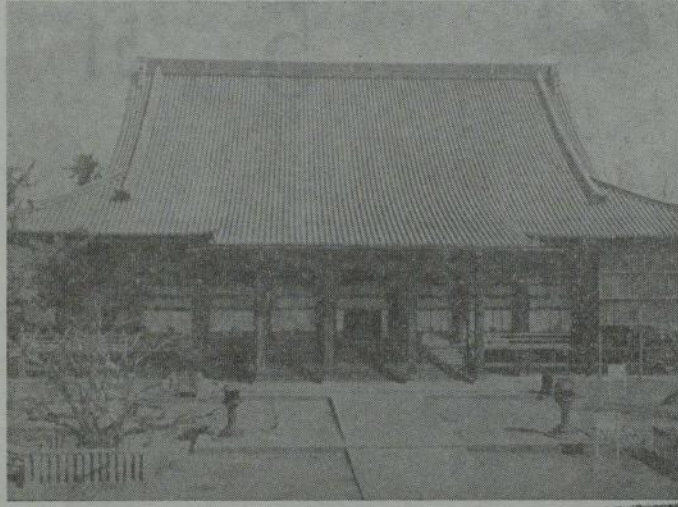
新緑の三重大会

三部会にわかれて

『仏教で強く正しく生きぬこう』のテーマのもと、第二十四回全日本仏教徒会議三重大会は、五月十六日〜十七日の両日、三重県津市一身田・真宗高田派大本山専修寺において開催される。

市一身田・真宗高田派大本山専修寺において開催される。

【写真は大会会場となる専修寺の御影堂】



三重大会開催要項
今、われわれは迷いのうちにある。明治以来信奉し続けて来た富国強兵の策が破れ去ったとき、巧みに乗り換えた経済のすべは勤勉な国民性と相まって一度は成功したかに見えた。だが繁栄への詛歌もまた束の間の夢と破れ、公害のおそれと無資源へのおびえは、国民ひとりひとりの心の奥深く根

世界史上空前の速さと巧みさで取込めるだけ取込んで来た日本人が、ふと気がついてみると、近代の政治も、経済も、思想も、科学も、技術も、それ等の全てが、如何に人智の限りを尽そうとも、なおはかり知れぬ深淵を裏にかくしている不気味さに漸く気がついて来たということが出来る。

人は道しるべを失った時に弱い。人は過ぎ来し方が誤っていたと悟らされたときに弱い。人は現代の進路が自分の意志にそぐわないと感じたときに弱い。そして未来が不確かだと思われるときにはおびえて来るのだ。だが仏陀の説き給うところ、そもそも自分に對置せられた外境とは常に先ず苦と観ずべきではなかったのだからか。その苦をわれわれが仏教以外の世間智で脱却しようと考えるのは、既に仏陀のいましめたまうたところである。

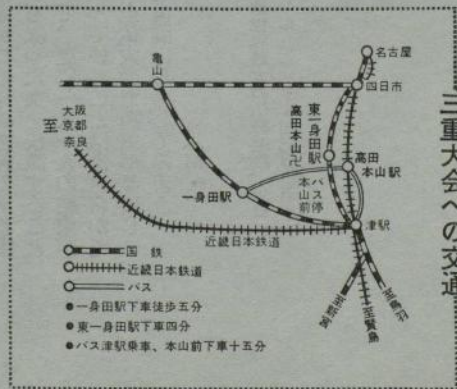
今、日本人は迷っている。迷っている者、弱き者に、正しく、強く生きる道を指し示すものは、うわついたブームでは

なく、願と行とにのっとった真の仏教への反省をおいて他にはない。他を救い得る為には先ず自分の思い違いと思ひ上りをたださねばなるまい。

共に集い、共に語り、共に行して、弱さへの迷いをはらし、全人類に仏教で強く正しく生きぬく大光明をかかげるよう一人でも多く参加されることを衷心より念願する次第である。

全日本仏教会
三重県仏教会

部会と会場
第一部会(実践部会) 仏教の生涯計画について 東院
第二部会(檀信徒部会) 檀信徒会の全国的組織を強化、拡充しよう 婦人会館
第三部会(婦人部会) 「宗教教育における婦人の役割」 本堂
宗派代表者会議 賜春館



三重大会に寄せて

大会副幹事長 真 溪 義 貫

全仏大会も今度で第二十四回を迎えるが、それぞれの大会には、やはり意義があつたし、その成果も仏教界の前進に少なからず役割を果した。しかし世間では決議・宣言のしっぱなしで、なんらこれ

という実践の展開を見ていないではないかとする酷な批判もある。われわれは、あえて抗弁はしないが、老若男女の仏教徒が全国から馳せ参じて一堂に会し、その時点における重要な社会問題について仏教徒が対応すべき方策を真剣に討議し、実相を認識し、決意を新たにしたことだけでも大きな収穫であつたと思う。

特にここ二・三回の大会では、人類の危機が深刻に論議されているなかで、その諸々の原因について研究し、実態について専門家の解説に耳を傾けて認識を深めた。

従来、地球自然は無限であり、地球の自己修復力も絶大であるとする錯覚の上に立って人間を考へ、その人間を対象として解答をトってきた仏教観も、実は地球自然は有限であつて、閉鎖された世界であると知ったことよつて「救い」というものも、個人から「種としての人間」を対象する方向に転換せざるを得な

いという仏教にとつても重大な曲り角に立ったことを、ひしひしと感じ取つた筈である。

スローガンへの反省

由来、仏教は未来に対しても、歴史に対しても、ほとんど関心をもつてない。未来は、現に今ここで、こうして生きて物を見、感じ、考えている存在としての個人が、より高い認識から解脱へと向つて行く方向としてのみ意味を持つにすぎないと考えてきた。原始仏教は、七世紀のヒンズー教の復興によつて勢力を失い、中国においては、道教によつてひどく通俗化され、現世的でプラグマティックな思想を克服することができず、後退し、やや本元的な姿において生きていたのは、東南アジア、チベットからモンゴールの一部、そして日本に於て大乘仏教として開花したといわれているが、果してその日本の仏教が、どこまで日本人の生き方の形成原理となつてきているのか、われわれは静かに手を胸に当てて考えてみる必要がある。

今年の三重大会は「仏教で強く正しく生きぬこう」というスローガンを掲げて

いる。過去二・三回の大会で、人類は滅亡するかも知れないという危機感を持つたが故に、われわれは仏教によつてこの危機を克服し、人類は永久に生きのびなければならぬという意欲と使命観に奮いたつて、本大会は仏教で強く正しく生きぬこうというスローガンを採用したのだと思う。

しかし、ここでわれわれは、一体強く正しい仏教的生き方とは何かと反問して見る必要がある。キリスト教や、ヒンズー教、回教その他の宗教を信する人々の生活信条は、まことに確固たるものがある。一面頑迷とも思われる点もあつて、これがために人類間の平和を乱す事態にまで発展していくことは周知の事実である。そこへゆくと仏教による戦争など殆んどみられない。このことは仏教は平和主義に徹し、極めて寛大な精神をもっているからだといえるが、その反面融通無礙の美名のもとで確固たる生活信条を持つていないことにも通ずるのである。

一体仏教徒は一般人に対比してどのような特殊性を持つていいのか。(よき意味で)これだけは仏教徒として堅持していくのだという生活信条は何一つ見出せない。仏教の哲学を信奉する学徒、仏教的先覚者に心酔する文化人はきわめて多い。しかし仏教徒一般が共通して生活に実践している特色というものは殆んどみあたらない。仏教徒にはパワーがないといわれるのも、このへんの事情を反映しているのかも知れない。

「マルクスは宗教は私事である」とい

った。われわれは決してそうは思わない。それは社会的存在であり、文化を形成する一面であることに間違いはないが、仏教を含む過去の宗教の未来観は、人間個人の死とは何か、死の先はどうなるのか、果して死後の世界はあるのか等を問題とし、それは樂觀的、悲觀的、あるいは解脱的のいずれのパターンにしても、個人の未来に対する神話、または解答であつた。勿論、個の存続を抜きにしては、種の存続を考へることはできないが、個の寿命が、種の寿命に比べて極めて短いものであつてわれわれは今や、個体を超えた「種」としての人類の存続を問題にしなければならぬ時であることを知らねばならない。

具体的な実践綱領

人間をはじめ、すべての生物は、生きられる限り生きようとするし、特に仏教の立場からは、原則的にはすべての生きものを生きのばさせねばならないのである。これがためには、環境を利用し、そして環境をできるだけ保持してゆく必要がある。つまり環境と生物の間には一種の平衡が保持されねばならない。そしてこの原則の中でこそ生物が進化して現在の生物的自然が形成されたのである。生態学という生態系とはこの事である。したがって生態系そのものを破壊するなら当然人類を含めて生物の破滅を招くことはいふまでもない。

今や自然的進化から人工的進化の段階に移り、やちもすると生態系の秩序が乱

されている。人間が自ら創りだした文化（体外の第二情報大系）は、自律性を持ち、生命を獲得した怪物のように加速的に進化して、もはや人間がその文化に適応しきれないまじになっていく。したがって人間の存在根拠がぐらついてきたのが現在である。

このような時代にたつて仏教徒はどのような対応の仕方か、人類の存続を可能ならしめようとするのか、強く正しく生きぬく手だてとは、どんな内容なのか、

このことを具体的に提言することなしには、今回のテーマやスローガンもまたまた空虚なものとならざるを得ない。

人類の滅亡から救う未来社会の目標を設定して、これが具現に努める仏教徒の実践綱領を、この大会で確立してほしい、いうならば仏教徒として守りぬく憲章と、仏教徒のそれぞれが、一生を通じて堅持してゆく仏教的な生涯計画を明らかにする真摯な大会であつてほしいと強く望むのみである。

全仏常務理事会 四議案を承認

全日本仏教会常務理事会は、四月十二日午後二時より、東京・芝の東京プリンスホテルにおいて、常務理事十三名が出席し開催された。

まず大谷光暢会長と田辺哲庵理事長が挨拶のあと、議事録署名委員に鎌田憲英師、栗本俊道師を選出し、上程された諸議案についてそれぞれ慎重に審議を重ね左記の通り決定された。

議案第一号「新団体本会加盟について」かねてより申請のあった仏教伝道協会の加盟について審議し万場一致で承認。

（別掲参照）
議案第二号「WFB大会日本開催について」

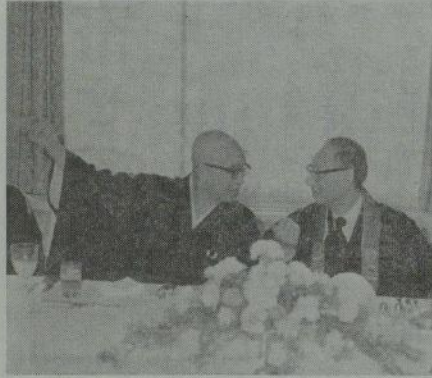
前向きに日本大会開催案を作る準備世話人会を発足させることを承認。

議案第三号「第二十五回全仏大会（埼玉）について」

第二十五回全仏大会を埼玉県仏が担当して開催することを承認。

議案第四号「各種専門委員委嘱について」

事務局案を承認。（別掲参照）
常務理事会に続いて、全仏役員懇親



会が同じく東京プリンスホテルで開かれ大谷会長、望月副会長を始め、田辺理事長、常務理事多数が出席、なごやかに会食の宴がもたれた。【写真は懇親会で歓談する大谷会長（右）と田辺理事長】

各専門委員さまる

全日本仏教会の各専門委員任期満了にともない、新しく各専門委員が選出され、常務理事会の承認を得た。各専門委員は左記の通り、（順不同・敬称略）

組織専門委員

板橋宥成、高辻円雄、桜井大乗、久保華太清、土持良栄、郡司博道、清水谷孝尚、神野信一、新聞信雄、鈴木靈孝、船口暉子、小林昭延、美濃部薫一、持田貫宣
文化専門委員

真溪義貫、摩尼清之、金岡秀友、白川良純、島田喜久子、門屋大寿、若林隆光
中根専正、塩入亮達、伊藤完夫、神原帰逸、井上日宏、宝田正道、堀秀之、河原晨晴
国際専門委員

岡野貴美子、麻布照海、村野宣忠、佐伯真光、花山勝友、松涛弘道、佐藤良純
新美孝道、伊藤堅純、近藤隆敬、黒田武志、織内七郎、柳了堅、古宇田亮文、西村輝成、奈良康明、望月良晃、長田順海、川島宏之

仏教伝道協会が加盟

加盟申請の出されていた仏教伝道協会は、常務理事会でその加盟が承認され、正式に全日本仏教会加盟団体となった。

仏教伝道協会の概要は左記の通り。
仏教伝道協会
所在地 東京都港区芝四の三の十四
代表者 宮本正尊

当会は、仏教精神の現代的理解を促進し、およびその振興を図るとともに、内外仏教徒間の交流協力を促進し、あわせて他宗教との理解協力を深め、もって人類平和と社会の実現に貢献することを目的としている。また事業として、仏教聖典の現代語訳、外国語訳の刊行、仏教講演会などの開催、仏教研究学生に対する奨学金の支給など幅広い活動をしている。
理事長・宮本正尊、理事・中村一元、雲藤義道、松原泰道、鎌田憲英、高辻恵雄、沼田恵範

寺院用具

浅草通り五鳳会加盟店

株式会社 決田商店

東京都台東区寿2-10-9（地下鉄田原町駅前）

電話 代表 (481) 4965

三重県仏教会

三重県仏教会の活動

三重県における仏教の大勢は、寺院数および二、三千五百ヶ寺で、真宗高田派が最も多く、次は曹洞宗である。昭和四十九年版の文化庁編宗教年鑑によると、三重県内にある仏教関係の宗教法人は、寺院二千五百八十四、教会三十一、布教所五十七、その他二、計二千六百七十五となっている。

県 仏 紹 介

なお教師は男二千九百六十五人、女七百七十七人、計三千六百八十二人、信者は百四十六万六千八百七十二人となっている。

三重県仏教会は、宗派、僧侶、男女年齢の別なく、各位の一致団結によって仏教の再建に努力しているがその主な活動状況は次の如くである。

最近の主な集會

(1) 第一回東海三県仏教徒代表者會議
昭和四十四年に一身田高田本山にて開催、「仏教の組織啓蒙強化について

て」を討議し三重、愛知、岐阜三県の他、全国の仏教会から二百名を参集した。
(2) 三重県宗教学法大研修會
二回にわたり県下十市十五町村を対象に実施した。

(3) 第一回三重県仏教徒大会
昭和四十五年鈴鹿市市民會館において高田本山と共催、千七百名を参集、「親鸞をたたえる集い」を行い盛大裡に終了した。

(4) 第二回三重県仏教徒大会
昭和四十六年鈴鹿市サーキット体育館において開催、二千名を参集、テーマ

は「和の祭典」で講演は法隆寺貫主間中定泉親下と官房長官木村俊夫氏の両氏であった。

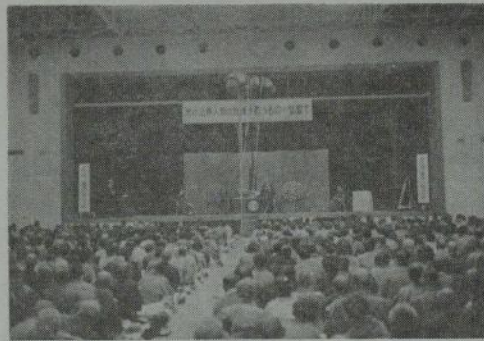
県下の寺院二千五百ヶ寺

活発な研修會や地区大会

(5) 昭和四十七年度地区仏教会
県下各地区仏教会主催のもとにそれぞれ祭典を実施した。

(6) 第三回三重県仏教徒大会
昭和四十八年、鈴鹿市サーキット体育館において開催、三千名を参集、テーマを「光の法典」として、「仏教で人類の危機を救おう」というスローガンの下にひらき元大正大学学長那須政隆親下の記念講演があった。このとき比

叡山根本中堂より不滅の淨灯を奉迎し、高田本山に献灯、翌日会場に奉迎、献灯した。
(7) 昭和四十九年度地区仏教会
「光の法典」の趣旨に副い、県下各地で法典を実施した。
代表者派遣
昭和四十九年には全日本仏教徒會議



第4回三重県仏教徒大会「光の法典」

兵軍大会に高嶋広勝師外数名を送った
昭和五十一年には香港仏教連合會主催の法会大会に江上秀雄師を送った。

社会的活動

各地で歳末助けあい運動を行ったり
慰霊法要を厳修したり、大会の余剰金を県下各地域の社会福祉事業に寄金して漸次民衆に溶けこみつつある。

今後の活動

(1) 青少年の教化活動
犯罪や非行青少年の教化対策として非行少年の原因が、幼少年期における物質的並びに精神的の影響が大いいため、家庭教育の重視や社会の浄化に意を用い而親並びに社会厚生員、特に保護司などに仏教精神による教化対策を講じてもらうようながすこと。

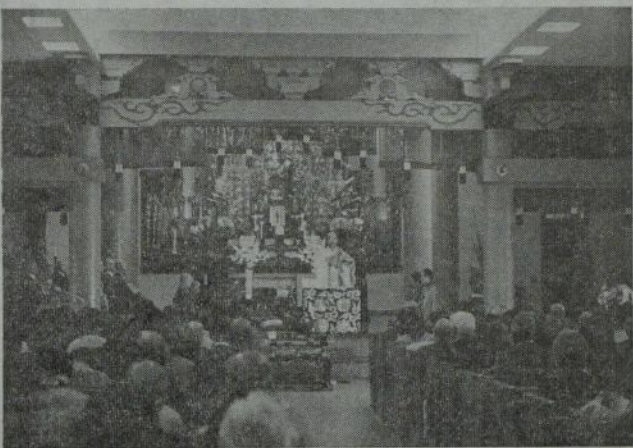
(2) 仏教保育の実践
現行の保育施設では、幼児の基本的生活習慣の形成、集団生活への適応と自主性の啓発、自然社会言語創作的表現などに対する興味の育成が主な目的とされているが、仏教的な態度と情操を更に育て人間としての正しくかつよい心の持ち方や行を身につけさせることを目的とし、保育者自らもすなおに自らをかえりみて、自己本位の愛情を子どもにいだくことなく保育の道にこそしむよう広く家庭並びに施設の保育者に対して児童観並に保育観をみなおして樹立するよう促すこと。

(3) 県仏教会館の建設
津市大門に一般人士の利用に供せんがために近代的設備の整った會館を建設中であるので完成の暁には研修や親睦に役立つのでこれの促進をはかる。

(4) 霊園の建設
とかく宗派問題がからんでいざこざのある墓地を、宗派にとられずしかも明るい感じのする墓地にするため津市郊外に建設を予定している。

ハワイの花まつり

各宗派合同で盛大に



記念式典に約一千人

ハワイ仏教連盟主催の「花まつり」は四月五日から十一日までの一週間（仏陀ウィーク）にわたって盛大に開催され、日本からも全日本仏教会を代表して安藤義祐事務次長をはじめ、曹洞宗を中心とする百七十名が来布し、花まつり各行事に参加した。

本年の花まつりは曹洞宗と真宗大谷派が当番ということであったが、各宗派が協力して非常に盛りあがりのある、意義深い花まつりであり、特に米国建国二百周年祭を記念しているだけに例年になく盛大であった。以下ハワイ花まつり仏陀ウィークの主要行事を報告する。

四月五日から十一日までの一週間を「仏陀ウィーク」と宣言するようハワイ州議会が決議したことによるもので、それ以来毎年行なわれている。

「ハワイ仏教の歩み写真展」
ハワイ仏教渡来八十年の歩み」として、移民開拓時代から、現代に至る三世代の仏教伝道史を写真により紹介。

花まつり記念放送

KOHQ、KZOO両放送局で、各宗開教使が連日花まつり記念説教をした。

仏誕祝賀夕食会

四月九日、アラモアナホテルにおいて有吉州知事をはじめ、仏教関係者などが出席し盛況であった。

花まつり記念式典

四月十一日、ブレイスデル・コンサート・ホールにおいて各宗総監、開教使や日本からの参加者など約千人が参列して盛大に修行了された。当日は各宗サンディースタールの生徒が讃仏歌などで花を添える中で、記念講演・松永スパーク米国国会下院議員、全日本仏教会会長祝辞・安藤次長代読、誦経滝澤導師・大山興隆師などがあり、式典のようは実況放送された。

今月の表紙の写真は、ポロブドール寺院である。

インドネシアジャワ島の古都ジョクジャカルタ市から北方約五十キロほど離れたマゲラン市の近くにある世界最大の仏跡の一つである。

八世紀半から九世紀にかけて当時のシユリビジャヤ仏教王国のシャイレンドラ王朝時代に建造されたといわれている。

このようにハワイの「花まつり」は各宗派開教使が全一仏教運動の実践として一致協力の努力をしており、予想以上の盛況であった。三世、四世と時代の推移による言葉・考え方などの問題はあるが今後ますます拡大発展するであろう。

【写真は花まつりの動行】

（報告・安藤義祐）

仏教美術史上の傑作

ポロブドール寺院

表紙の写真

その後仏教の衰退、イスラム教の浸透等によって荒廃し、十八世紀にいたって火山灰とジャングルの茂みの中から発見されたという。常緑の木々、まわりの山々を見おろす様な感じのポロブドール、原地語で「丘の上の大伽藍」といわれ、仏教遺跡として、その巨大さは他に類を見ない。全体が幾何学的造形美を誇る仏教美術史上の傑作とされている。

近年、陥没等による破損がはなはだしく、ユネスコを通じて、この遺跡を救う運動が国際的に呼びかけられ、現在その修復が始められ、五、六年のちにはまた立派な姿がみられることであろう。（TT）

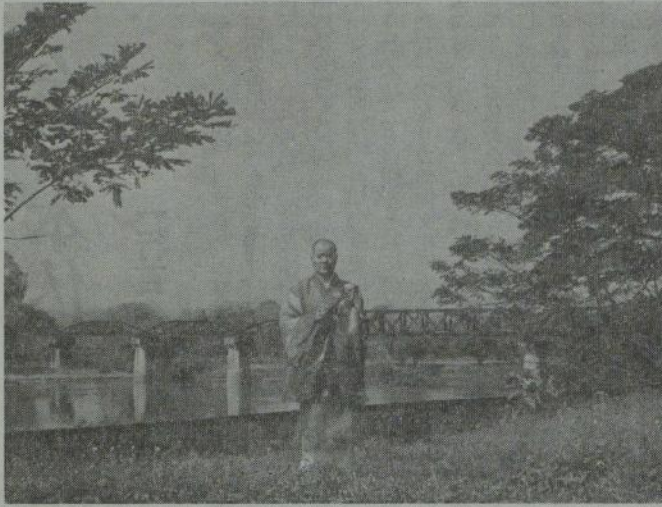
東南アジア戦跡巡拝

宮城県・妙照寺住職

鈴木錬成

二月十二日、東京空港を離陸し一路東南アジアへ向って飛行する。タイ国ドムアン空港に着陸、約六年振り三度目、いやそれ以前の古い「戦争時代」の悲しい曲折、あまたの回想が一瞬胸をつきあげてきた。このインド支那半島の大地の涯に、いまなお眠る幾多の戦友同胞の限らない叫声が聞こえてくるようだ。移り変

る歲月は流れ去るうとも、祖国に還らざるまま永遠に埋もれている人達に、私は何かを捧げなければならぬと思い、出かけてきたのだ。
二月十三日、バンコクの朝は涼しい。マイクロバスにて約二百キロ離れたカンチャナブリー（戦場に架ける橋）へ。戦時タイ緬鉄道建設の強行工事のためシン



ガポール作戦の捕虜五万五千人の英印軍兵士が、灼熱下のこの路を徒步行進していった。これに向って連合軍の反撃は日毎に烈しく、彼岸の屍が路傍に続き死臭を放っていたのだ。

バスが郊外に出ると原野は渾しなく、椰子林と水田が続くばかりで、ニッパの屋根根にアンベラの壁だけの農家があちこちに点在するが、そのたまたまいはアジアの貧困を象徴するかのようである。

カンチャナブリー市街を通り抜けて行くと、前方に濃いみどりの林と山巒があらわれ

写真は「戦場に架ける橋」を背に筆者の鈴木錬成師

その手前に河の流れがみえる。「戦場に架ける橋」に到着したのだ。河のほとりにそびえる灰色の塔の前にたった。「慰霊」の二字をつつむようにブーゲンビリヤの花やプーチエの花が咲く。

祖国日本から遠く離れ、此処にさみしく立ち続ける墓標にむかい、日本より携えてきた日の丸や餅・酒・菓子などの供物をならべ、写経・千羽鶴・散華・慰霊文を供えた。石山師（女川町洪秀院）と二人で誦経、観音妙智力 能救世間苦

現地の人たちも合掌

「現代の自由と平和」は、ここに眠る英霊の犠牲の上に築かれたものである。それに応え、それに報いる気持で、心を一杯にしながら呼びかけた。またバンコク在住の友人である寺尾市松さんが、全日本仏教会の慰霊文を代読するころにはうしろの方でタイの婦人や子供たちが、十数人集まって合掌している。

塔を離れ西の方へ五百メートルほど行ったところにある鉄橋に出る。ゆるやかに澄む河に、写経を流すと黒い文字が、河の水とみどりの葉影にゆれて映える。この地の作戦に参加した数、日本軍八千人、連合軍五万五千人、現地人一万八千人、その約半数以上の三万一千人が犠牲者といわれる……。是の如きらの火熾燃としてやまず」の如來の金言を感じるのである。

二月十四日、市内寺院参拝後、ワットリヤーアの日本人納骨堂参拝へ。赤いハ

イビスカスの花の咲く階段前にて誦経、在留日本人会の心尽しできれいになってゐる。午後シンガポールへ向う。

二月十五日、プキテマ道路をジョホール水道（国境）に向った。プキテマ高地はシンガポール防衛の連合軍と日本軍が最後の白兵戦を展開したところである。ここで合掌し、車はジョホール水道へ進む。ここでも千羽鶴を流し写経を広げて供養した。

フィリピンでの感慨

二月十六日、シンガポールを發ちフィリピンへ。

二月十七日、マニラの郊外にある米軍墓地へ行く。一万七千の米軍兵士の白い大理石の墓標が、緑の芝生に並ぶ。勝者と敗者の差を歴然とみせつけられた。日本軍は司令官山下大将以下四十数万人の墓らしいものはこの町に何一つみあたらない。まことに残念である。

サンチャゴ要塞跡をめぐる、ルネタ公園に出る。日本海軍陸戦隊が激烈な市街戦を展開し、まだ壁や柱に弾痕が無数に残っている。

そのあとマニラ湾の波打際に立ち手を合す。正面にコレヒドール島、右がバターン半島である。またそれだけでなくルソン島、レイテ島、ミンダナオ島など無数の島々や、海城に散った英霊に向って弔慰の祈りを捧げる。居並ぶ人達とともに、この地にとどめられた同胞の深い悲しみに冥目し、平和を祈念するものである。

全日本仏教会訪米団

一行百名 六月一、二日出発

アメリカ建国二百年祭を記念する全仏主催の全日本仏教会訪米団は、六月一日に第一団、六月二日に第二団の約百人が出発する。

アメリカ建国二百年の歴史の中にあって、日本仏教も移住者と共に幾多の困難を超え、アメリカ精神文化に大きな影響を与えつつ、さらに成長しようとしている。全日本仏教会ではこの現状を見、また日米仏教徒の交流を深めるため訪米団を派遣することになった。特に六月三日には第一団、第二団が合流して、ロスアンゼルス仏教連合会と交換会を行うことは意義深いことである。そのあと各地をまわり、ハワイを経由して帰国するが、第一団は米馬規雄国際文化局長、第二団は竜山哲成組織局長・岩脇宏信財務部長が事務局として参加する。

WFB準備世話人会

マスタープラン委員を選出

既報の如く、WFB世界大会は昭和五十三年か五十四年に日本で開催されることになったが、その準備世話人会第一回会合は四月十六日午後一時半より全仏事務局で開かれ、十七名の世話人から熱心な意見の開陳がなされた。当日は大むね次の各点が確認された。

- (1) 開催期日を昭和五十三年（一九七八年）十月二日（日）より六日（金）
- (2) 全仏役員を中核とした「WFB日本大会実行委員会」（仮称）を組織して実動に移りたい。各仏教系新興宗団の方々の協力を得たい。
- (3) 必ずしも加盟宗団だけの援助でなしに、広く有縁仏教徒の財的援助を仰ぐようにしたい。それには、取敢えず広報宣伝が早急な事務である。
- (4) マスタープラン委員を選出し、企画、組織、予算等を検討すること。マスタープラン委員を次の各位にお願いすることとした。
 - 麻布照海、摩尼清之、松涛弘道
 - 村野宣忠、柳 了堅、若林隆光
 の外、事務局側。

- なお、同委員会は四月二十六日に開催し、その結果を理事会に報告することになった。
- 一日 局内会議
 - 七日 全仏誌編集会議
 - 八日 孝道山花まつり出席
 - 九日 泉涌寺開山七五〇遠忌参列
 - 九日 宗連理事会
 - 十一日 ハワイ花まつり出席
 - 十二日 常務理事会
 - 十四日 全仏役員懇親会
 - 十六日 三重大会打合せ（三重）
 - 十六日 宣言決議文起草委員会
 - WFB世話人会
 - 局内会議
 - 十七日 千葉県仏總會出席
 - 二十六日 WFBマスタープラン委員会
 - 二十七日 三重大会幹事会
 - 文化会議運営委員会
 - 監査会
 - 二十八日 仏教讃仰会公開討論会出席

ドル団々長として、タイ、インドネシアを巡拝して帰国した、ルンビニ幼稚園（埼玉県川越市・真行寺）の武田慧照師は、四月五日に全日本仏教会を訪れ、ルンビニ復興計画の資助として金十万円を事務局に託した。

仏陀生誕の地ルンビニは、ネパール政府が国際協力を得て巡拝聖地として再開発している。また第十一回WFBタイ大会の総会でも、ルンビニ園再開発について経済援助をしようと決議された。

事務局録事（四月）

先に世界仏教徒会議日本代表団ホロフ

ルンビニ園再開発に十万円

武田慧照師が寄付

発行人 鱒 正浩
編集人 来馬 規雄

発行所 財団法人
全日本仏教会

東京都台東区西浅草一ノ五ノ五（東京本願寺内）
電話 〇三（八四三）六三三・四一〇三

お寺に仏旗をかかげよう

大 150C—よこ 247C ¥13,000円 小 70C—100C ¥ 3,000円
中 90C— 135C ¥ 5,000円 手旗 35C— 50C ¥ 1,500円

別染製 堅牢（全日本仏教会制定意匠登録済）

各地区仏教会でまとめて御注文の際は価格の御相談に応じます。

財団法人 全日本仏教会

〒111 東京都台東区西浅草1-5-5

電話03・843・6341~3

全仏輪袈裟

こげ茶、法輪マーク付き
¥一、二〇〇円

法輪バツチ

徑一〇cm、ネジ式
¥一、〇〇〇円